トリンブルの目に映るもの
——「失われた十年」に関する一考察——

山 路 雅 也

序

F・スコット・フィッツジェラルド（F. Scott Fitzgerald）はその短い生涯の壮年期から晩年にかけてアルコール中毒に苦しめられたが、この宿痾の悲痛な体験が皮肉にも珠玉の作品をもたらしたことは周知の通りだ。主人公ディック・ダイバー（Dick Diver）の転落に飲酒が色濃く影を落とす『夜はやさし』（*Tender is the Night* 1934）や、放埒の末に妻を亡くした男の悔恨を哀切を極めて描く「バビロン再訪」（"Babylon Revisited" 1930）などはその好例であろう。これら以外では、アルコールの魔の手から逃れられぬまま恋人の期待を裏切り続けた青年が非業の最期を遂げる「新緑」（"A New Leaf" 1931）や、担当するアル中患者の惨状とそれを前になす術もなく立ち尽くす女性看護師の悲嘆を描いた「アル中患者」（"An Alcoholic Case" 1936）といった作品を思い起こすむきもあろう。本論ではこれらを「アルコールもの」と呼ぶことにしよう。

1939年『エスクァイア』誌（*Esquire*）に掲載された「失われた十年」（"The Lost Decade"）もまた、この「アルコールもの」の範疇に入れても差し支えあるまい。ニューヨークの週間新聞社で働く編集者兼雑用係の青年オリソン・ブラウン（Orrison Brown）は、かつては高名な建築家であったルイス・トリンブル（Louis Trimble）のランチでの饗応役を命じられる。オリソンはトリンブルの奇妙で不可解な言動に触れるうち、実はこの建築家が1930年代の間ずっと酒に溺れ、日常とは隔絶したアルコールの霞のなかに生きてきたことを知り愕然とする。するとここで唐突に作品は幕を下ろしてしまう。

「失われた十年」はこの様に、上辺だけを見れば元アル中患者との午後の些細な一齣を切り取っただけの小品に過ぎない。だが注意深い読者ならば、この作品の基調が他の「アルコールもの」のそれとは大きく異なることに気付くであろう。本論では先ず、その基調がいかなるものかを、他の「アルコールもの」のそれとの比較において検討し、それが作品に貫かれ

るトリンブルの冷徹な視点であることを明らかにする。次にその視点及びそこに開ける地平の詳細を探るべく、「ひび割れ」エッセイ群（“Crack-Up” essays 1936)、『偉大なるギャツビー』（*The Great Gatsby* 1925)、「泳ぎ手たち」（“The Swimmers” 1929）の三作品を考察する。これらを経ることで、本論がその目標とする、この小品に潜むそのサイズとは不釣合いなほどに遠大なメッセージへの到達が叶うことになるのだ。

I

「失われた十年」の基調を見る前に先ずは他の「アルコールもの」のそれを確認しておきたい。『夜はやさし』では理想に燃える新進気鋭の精神科医であったディック・ダイバーがやがて酒に溺れ、「もう誰にも幸福を与え」られぬ「黒死病」（*Tender* 219）の如き人物と化してしまう。信用も家庭もすべてを失った彼は、家族や仲間と過ごしたリヴィエラの浜を去るにあたり司祭さながら「右手を上げてカトリック風に十字を切り、高いテラスから浜辺に祝福を与え」（*Tender* 314 ）るが、それは自らに対する弔いの儀式にも似て死の予感すら醸し出そう。「バビロン再訪」では主人チャーリィ・ウェイルズ（Charlie Wales）が愛娘の養育権を誠意の限りを尽くし訴えるが、それもひとえに飲酒がらみのトラブルの末に妻ヘレン（Helen Wales）を亡くした忌まわしい過去への烈しい自責の念の発露に他ならない。結局、養育権の獲得も叶わぬまま、「ヘレンも自分がこれほどまでに孤独になることを望んだりはしなかったであろう。チャーリィはそう信じて疑わなかった」（“Babylon” 402 ）という哀切を湛えた記述をもって作品は締め括られる。「新緑」ではアルコールの虜となった恋人ディック・ラグランド（Dick Ragland）の再生を信じて疑わぬヒロイン、ジュリア・ロス（Julia Ross）の健気さが哀れみを誘う。ジュリアの期待を悉く裏切った挙句ディックが大海に身を投じた知らせをもって終わるこの作品に、理不尽さと空しさ以外、一体何を見出せよう。「アル中患者」に至ってはタイトルもそのままにこの宿痾に苦しむ者の悲痛と周囲の絶望が描かれる。担当患者の正真正銘の「死への願望」（“Alcoholic” 442）を目の当たりにしてしまった看護師が作品の末尾で堪え切れず上司に訴える言葉――「どんなに頑張っても、それを打ち負かすことなど出来るわけがないのです....実際には手を差し伸べることも出来ないってことが残念で

仕方ないのです。何もかもが空しいのです」(“Alcoholic” 442) ——には、希望のかけらもない。この様に「アルコールもの」には深い絶望や哀切、無力感や空しさがその基調となって作品の奥底で暗く渦巻いている。そこに救済や希望が一条の光を投げかけることはない。

こうした「アルコールもの」の基調と比べると「失われた十年」のそれは随分と趣を異にする。前者に見られる暗い澱みにも似た底流はそこには認められぬ筈だ。確かに10年以上の長きに渡り「どうしようもないほどに飲んだくれて」(472)[1]いたトリンブルは、その間「文明から隔離され」(471)たかの様な生活を余儀なくされはしたであろう。だが現在の彼の「表情に窺がえるのは純粋で確固たる好奇心ばかり」(471) であり、それは悔恨や自責に根差す暗い悲愴とは無縁だ。しかしだからと言ってそこに明るい希望や期待があるわけでもない。この作品をアルコール中毒という深淵からの生還の物語と見る論考[2]に異論はないが、しかし洋々たる未来を予感させるものが果たしてここにはあるだろうか。トリンブルの言動の奇抜さや不可解さばかりが目に付いて、明るい展望を仄めかすものを見出すのは難しいのではあるまいか。もし仮に僅かでも希望めいたものがトリンブルから立ち上っていたとするならば、作品の末尾でその後姿を見送るオリソンが独り洩らす痛烈な罵りの言葉——「ちくしょうめ....十年間も飲んだくれやがって」(473) ——はどの様に説明すべきであろう。ここに「失われた十年」の基調の一端が窺がえよう。そこでは安直な一喜一憂や感傷といったものが一切退けられているのだ。

その更なる詳細を求めるのならば、アリス・ホール・ペトリィ (Alice Hall Petry) の論考は示唆に富むであろう。ペトリィは「失われた十年」の「中心となるメタファー」にトリンブルの「視覚」を挙げ、その「細部へのこだわり」や「シュールな受容力」に我々の注意を喚起する (Petry 258－259)。これらは作品の中盤、響応役の大任を果たすべくオリソンが「今、一番ご覧になりたいものは？」(471) と建築家に尋ねたところで不意に顕在化する。ややあってからトリンブルは次の様な返答をするのだ。

> 「そうですねえ——人の後頭部がいいですね...首もいいかな——頭部と胴体の接合具合を見たいのです。あの二人の女の子たちが父親に何を話しているのかを聞いてみたいものです。必ずしも話の中身じゃなくて、言葉が浮くのか沈むのかをね、話し終えた時に彼女たちは口を

どうやって閉じるのでしょうかね。まあ、リズムの問題といったところでしょうか」(471－472)

返答そのものが要領を得ぬ上に、その「視覚」に訴えて止まぬものが「人の後頭部」や「首」、「頭部と胴体の接合具合」といったものなのだから、オリソンのみならず我々読者が困惑するのも無理はなかろう。それは華美な衣服や装飾品を剥ぎ取られ一個の物体と化した身体部位の羅列であり、まるで人体解剖を思わせる様で余りに生々しい。正に「シュールな受容力」のなせる業であろうが、しかし我々はその「シュールな」側面にばかり眼を奪われるのではなく、そこに物事をありのまま受容しようとする峻厳且つひたむきな視点を認めなければならない。

エドワード・J・グリーソン（Edward J. Gleason）は「トリンブルはもはや自らが設計した建造物には興味はなく、その関心はそれまで彼が逸してきた人間活動の仕組み――つまりは生きることそのもの――に向けられている」(Gleason 227) と指摘する。今やトリンブルにとって、かつての高名な建築家としてのキャリアを具象する、技術の粋を凝らし「自らが設計した建造物」など取るに足らぬ虚飾に過ぎない。そうした卑小な世俗の皮相には目もくれず、彼は「生きることそのもの」、すなわち身体部位の羅列に象徴される様な一切の虚飾を剥ぎ取られたありのままの現実を、その剥き出しの生々しさに怯むことなく、ひたすら追い求めるのだ。

ここに「失われた十年」の基調が明らかになろう。この作品においては、ありのままの現実を受容すべく感傷や世俗といった一切の夾雑物が取り去られ透徹とした視点が、その基調として徹頭徹尾貫かれているのである。

II

こうしたトリンブルの視点では一体いかなる地平が開けているのであろうか。まさかそこに浮かび上がるものがあのグロテスクで生々しい身体部位だけということはあるまい。それを考察するには、この僅か1100語ばかりからなる小品は余りに寡黙に過ぎよう。そこで次に「ひび割れ」エッセイ群に目を転じたい。なぜなら後述する通り、このエッセイ群でフィッツジェラルドはその視点を共有すると、トリンブルに代わりそこに開ける地平を開示するからである。

「失われた十年」の掲載に先立つこと3年、フィッツジェラルドは同じ『エスクァイア』誌に1936年2月から3ヶ月に渡り彼自身の「神経的そして心理的崩壊の検死解剖」(Turnbull 269) と目されるエッセイ群を発表した。それが「ひび割れ」("The Crack-Up")、「貼り合わせ」("Pasting It Together")、「取り扱い注意」("Handle with Care") からなる「ひび割れ」エッセイ群である。そこで彼は尾羽打ち枯らした自身の惨状を淡々と記している。本論の冒頭で述べた通り、フィッツジェラルド自身アルコール中毒には大いに苦しめられたが、1930年代に入ると妻ゼルダ (Zelda Fitzgerald) が精神病を発病し、その苦境に追い討ちをかけることとなった。これを機にその人生が凋落の一途を辿ったことは広く知られるところだ。『エスクァイア』誌の編集者アーノルド・ギングリッチ (Arnold Gingrich) は経済的にも困窮し苦境に喘ぐこの作家を救済すべく、その様をありのまま綴るよう促し、その結果生まれたのがこのエッセイ群である。このあたりがエッセイ群を作家の「検死解剖」とする所以だが、そうした背景を考えるとこのエッセイ群もまた「アルコールもの」の範疇に入るかもしれない[3]。

このエッセイ群においてフィッツジェラルドは、その落魄の境涯を正面から見据えている。彼は「魂の漆黒の闇夜では時刻はいつも午前三時だ」("Pasting" 145) と記すが、我々はその「漆黒の闇夜」のなかに作家の窮状のみならず、一切の夾雑物を取り払ったかの様なあのトリンブルの透徹とした視点をも見出すことになる。フィッツジェラルドは「それが自分にとっての唯一の生きる術なので作家であり続けるしかない」("Pasting" 151) とした上で、現状を次の様に報告している。

> これでやっと私はただの一人の作家になれた。今までずっとそうなろうと努めてきた人物は大層な負担となってしまったので、私はその人物を「追っ払って」しまったのだが、それは土曜日の夜に黒人の売春婦が商売敵を追い払うのと同じで、ほとんど良心の痛みも感じなかった....J・P・モーガンとトーファン・ポークラークと聖フランシス・アッシジの三者を組み合わせてそこにアメリカ風のアレンジをふんだんに加えた様な、ゲーテ=バイロン=ショーの伝統に連なる全人にならんと欲した昔の理想は、既にガラクタの山の中に打ち捨てられている。("Handle" 153)

ここで我々の気を引くのは、その実に淡然とした筆致であろう。「ゲーテ=バイロン=ショーの伝統に連なる全人にならんと欲した昔の理想」は、今やすっかりその光沢を失い「ガラクタの山」と化してしまっている。だが、フィッツジェラルドは別段無念さや悲哀を滲ませることもなく、「ただの一人の作家」としてそれをありのまま受け入れているのだ。やがて彼は堆積するその夢の残滓を前に次の様に言い放ってみせる。

> ...私のドアの上には猛犬注意の看板がいつも架けられている。行儀の良い犬となるよう努めるつもりだが、君がもし肉のたっぷりと付いた骨を私に投げ与えてくれるなら、私は君の手まで舐めるかもしれない。(“Handle” 154)

自らを愛想を振り撒く一匹の犬に喩えるこの引用を、自暴自棄や自虐の極みとして片付けるのは容易い。だが我々はそれを、感傷に溺れることなく「ただの一人の作家」として冷徹な視線を貫こうとする、フィッツジェラルドの決意表明と捉えるべきであろう。夢や理想が空しく潰えようとも、フィッツジェラルドはそれから目を背けたりはしない。それどころか「肉のたっぷりと付いた骨」に嬉々として喰らい付く犬よろしく、外聞を憚ることなくただひたすらに現実のみを凝視し、それをありのまま受け入れようとするのだ。「漆黒の闇夜」にその冷徹さを際立たせる作家の視点は強かな諦観と呼ぶに相応しく、それは先述の透徹としたトリンブルの視点を想起させて止まない。この様にフィッツジェラルドはトリンブルとその視点を共有することで、そこに開ける地平を彼に代わりエッセイ群において開示するのである。

彼は先ずエッセイ群の冒頭で「勿論、人生とはおしなべて一つの崩壊の過程に過ぎない」(“Crack-Up” 139) と定義した上で次の様に続けてゆく。

> この短い手記を続ける前に一般論を述べさせて頂きたい。——第一級の知性の基準となるのは、二つの相容れない考えを同時に抱きしかも機能させ続ける能力である。例えば、事態が絶望的であると分かっていても、なお決然として打開に当たれなければならない。(“Crack-Up” 139)

フィッツジェラルドの定義によるならば、人生が絶望に帰結することは避けられない。それにもかかわらず彼は尚早な断念を退けると、「事態が絶望的である」という過酷な現実を甘受しながらも「なお決然として打開に当た」ることを、「第一級の知性の基準」と謳うのだ。エッセイ群で彼が洩らす言葉——「努力の空しさと奮闘の必要の均衡を保たなければばならない」(“Crack-Up” 140) ——は、この「基準」を受けての自戒に他ならない。こうしてエッセイ群において開示される通り、トリンブルの視点では、絶望を必然としながらなお奮闘努力を課す「第一級の知性の基準」なるものがその地平に開けていたのである。

Ⅲ

ここで我々が注目すべきは、先の引用においてフィッツジェラルドがこの「基準」を開示するに当たり、敢えて「一般論」と断りを入れていることだ。「第一級の知性の基準」などと大仰な呼称を与えられたこの「二つの相容れない考えを同時に抱きしかも機能させ続ける能力」——不可避の絶望を確信しつつなお敢行される奮闘努力——を、マルカム・カウリー (Malcom Cowley) 言うところのあの有名な「二重の視点」(double vision)[4]と見るむきもあろう。だがわざわざ「一般論」と断りを入れるからには、この「基準」がそれを捉えたトリンブルのあの透徹とした視点ともども、作家個人の特異気質を大きく超えた、何やら普遍性を帯びたものであることが仄めかされるのだ。我々はその証左を『偉大なるギャツビー』に見出すことになる。

「失われた十年」は、トリンブルの後姿を見送るオリソンが「突然、自分のコートの生地に触れ、更に親指を伸ばして傍らのビルの花崗岩に押し当て」(473) るところで終わる。ペトリィはこの奇異な行為を、「現実に対する高感度の感受性」を具えたトリンブルの「シュールな受容力」、即ちあの透徹とした視点が人に「感染しやすい」ことの表れだとしている (Petry 259)。「ひび割れ」エッセイ群でもフィッツジェラルドがトリンブルと視点を共有していたが、それもまたこの表れの一つであったわけだ。こうした「感染」が認められるのはエッセイ群に限られたことではない。『ギャツビー』においても語り手ニック・キャラウェイ (Nick Carraway) がそれに「感染」したにちがいなく、彼もまたその視点を共有しているのだ。

最終章でニックは、このひと夏の悲恋の舞台となった東部社会を次の様に総括している。

> 東部がもっとも僕の胸を躍らせた時でさえ、オハイオ河の向こう側にだらしなく広がって伸びている、あの退屈な町々に対する東部の優越を僕がほぼ認めていた時でさえ、僕の目に映る東部は絶えずある種の歪みを抱えていた。(*Gatsby* 137)

東部社会の中心地「ニューヨークには世界の誕生を思わせる虹色の光彩が満ち溢れていた」("My Lost City" 108) とは、後年、『ギャツビー』の背景でもある繁栄と狂乱のジャズ・エイジ (Jazz Age) を回想したフィッツジェラルドの言葉だ。ここでニックは目映いばかりに光り輝く時代の皮相に目が眩むことなく、「もはや矯正が効かぬほどに歪ん」だ「エル・グレコの手になる夜の情景」(*Gatsby* 137) のごときその醜悪な真相を見て取っている。「失われた十年」においてトリンブルが虚飾に満ちた世俗の皮相を容赦なく切り捨て、ありのままの現実をひたすら追い求めていたのは先に述べた。引用に貫かれるのはそうしたトリンブルの峻厳なる視点に他なるまい。ニックもこの様にトリンブルの視点を共有すると、更にその透徹の度合いを深め、先ほどのエッセイ群において同様、「第一級の知性の基準」をその地平に浮かび上がらせることになる。

『ギャツビー』がアメリカ文学史上、不動の位置を占めるのは最終章においてニックの視点が殊に冴え渡る点に負うところが大きいのではあるまいか。清秋の晩、月影に濡れるロング・アイランド海峡を見遣りながら、ニックは悠久の時を遡り黎明期アメリカの「新世界の初々しい緑の胸」に抱かれると、「オランダの船乗りたち」と時空を越え密やかに交歓する。そしてニックは「この古の未知なる世界に想いを馳せながら、ギャツビーが初めてデイジーの桟橋の突端にあの緑色の灯を見つけ時の彼の驚異の念に思い至」ることで、ギャツビー (Jay Gatsby) がデイジー (Daisy Buchanan) に寄せる恋慕と、かつて旧世界の人々が新世界に託した「人類史上最後にして最大の夢」——アメリカの夢——を等号で結ぶのだ (*Gatsby* 140－141)。この瞬間、闇酒屋の純愛物語は壮大なるパースペクティブのもと、圧倒的な高みへと上り詰めアメリカニズムが横溢する一大叙事詩へと昇華するわけだが、同時にこの時、アメリカの夢そのものが根

幹より烈しく揺さ振りをかけられることになるのを見逃すわけにはゆくまい。

一人の女性を愛する余り己の素性を偽り悪事に手を染め富の蓄積に狂奔したギャツビーがどうして、「オランダの船乗りたち」と肩を並べアメリカの夢を担う「神の子」(*Gatsby* 76) となれようか。一方、ギャツビーの富に目を奪われ彼がうず高く積み上げてみせる高価なワイシャツの山を前に感極まり号泣したかと思えば、その彼に自らの轢逃げの罪を被せ見殺しにするデイジーがどうして、処女地アメリカの「緑の胸」に花開く純情可憐な一輪のひな菊 (daisy)[5]となれようか。こうした二人の色恋沙汰がアメリカの夢と等号で結ばれることで、ニックの視点では、アメリカの夢の胡散らしさが俄かに浮き彫りになるのである。

この様な胡散らしさを見極めた上でニックがあの余りに有名な言葉で作品を結ぶと、そこに先述の「第一級の知性の基準」がアメリカにおける普遍性を顕にして浮かび上がることになる。

> ギャツビーはその緑の灯を信じ、僕たちの目の前を年々後退して行くあの身も打ち震えるような未来を信じていた。その未来はあの時には僕たちをうまくかわして逃げ去ってしまったけれど、そんなことは何でもない——明日はもっと早く走って、もっと遠くまで両腕を伸ばしてやろう.....そうすれば或る晴れた朝には——
>
> こうして僕たちは、流れに逆らう小船のように、絶えず過去へと押し戻されながらも力の限り漕ぎ続けるのだ。(*Gatsby* 141)

アメリカの夢には胡散らしさが纏い付いており、それはもはや如何ともし難い。それ故にその夢の実現を約する「身も打ち震えるような未来」は、「僕たちの目の前を年々後退して行く」ばかりなのであり、その夢の実現の暁に他ならぬ「或る晴れた朝」の到来についても遂に明言されずじまいだ。それにもかかわらず、遠退いて行くその未来に向って「もっと早く走」り、「もっと遠くまで両腕を伸ば」すよう求められるのである。この勧奨は作品の末尾でまるで念を押すかの様に、過去から未来へと伸びる奔流に弄ばれ「絶えず過去へと押し戻され」ようとも、到達が叶わぬその未来に向って「流れに逆らう小船」を「力の限り漕ぎ続け」よ、と言葉を換えて繰り返されている。徒労感に満ち絶望の強い予感を伴うこの勧奨が、「第

一級の知性の基準」——不可避の絶望を確信しつつなお敢行される奮闘努力——に合致していることは言うまでもない。トリンブルの視点とその地平に開けていたこの「基準」は、こうしてアメリカの夢と抱き合わせで提示されることで、アメリカにおけるその普遍性を殊更に強調されるのだ。

Ⅳ

この様なトリンブルの視点とそこに浮かぶ「第一級の知性の基準」なるものの真相は、「泳ぎ手たち」においていよいよ詳らかとなる。1929年10月に『サタデイ・イヴニング・ポスト』誌（*Saturday Evening Post*）に掲載されたこの短編では、妻の不貞により精神的破綻寸前にまで追い詰められた主人公ヘンリー・マーストン（Henry Marston）の再生がアメリカとヨーロッパの対照を背景に描かれる。作品は危機的状況を何とか克服したヘンリーがアメリカを後にしてヨーロッパに向うところで幕を下ろすが、ここでもまた強烈なアメリカニズムが沸き起こる。ヘンリーが「アメリカがそこにあるということに抗し難いほどの感謝と喜びに捕らわれ....アメリカの最良の部分が世界の最良の部分なの」（"Swimmers" 209）だと確信するこの場面を、メルヴィン・J・フリードマン（Melvin J. Friedman）も「アメリカ賛歌のごときもの」（Friedman 258）と見做している。こうして作品が濃密なアメリカニズムに被い尽くされ、マシュー・J・ブロッコリ（Matthew J. Bruccoli）が「雄弁なるコーダ」（*Bits* 10）と呼ぶその結びに至ると、フランス、イギリスに次いでアメリカの定義付けが行われるのだ。

> フランスとは国土であり、イギリスとは国民であったが、しかしアメリカには未だ理念めいたものが纏い付いていて、それを言葉で表すことはもっと難しかった——それはシャイローの墓所や偉人たちの疲れてやつれた不安げな顔であり、その肉体が朽ち果てる前に早くも空疎になった名句のためにアルゴンヌの森で死んでいった田舎の若者たちであった。アメリカとは厭わず前に進もうとする熱情であった。（"Swimmers" 210）

ここにトリンブルの視点に浮かぶあの「基準」を見て取るのは容易であろ

う。たとえシャイローでは冷たい土の下で朽ち果て、アルゴンヌでは空しく屍を晒すことになろうとも、たとえ「名句」が「空疎とな」り夢や理想が潰えようとも、それでもなお「厭わず前に進もうとする熱情」があるとすれば、それをもってアメリカと定義されるのだ。これは取りも直さず、不可避の絶望を確信しつつなお敢行される奮闘努力を旨とする「第一級の知性の基準」の充足に他ならない。トリンブルの視点に浮かんでいた「基準」とは詰まるところ、アメリカに到達し得るか否かの試金石に違いなく、それ故、そこに仰々しいアメリカニズムが付着しアメリカにおけるその普遍性が強調されていたとしても、それは当然の成り行きと言えよう。

引用の「雄弁なるコーダ」にも「アメリカには未だ理念めいたものが纏い付いて」いるとある通り、独立時の高邁なそれを持ち出すまでもなく、アメリカは理念追及型国家と言えよう。理念追求と一言で言っても、それが困難を極めたことは周知の通りだ。アーサー・M・シュレンジャー・ジュニア（Arthur M. Schlensinger, Jr.）もその著書『アメリカ史のサイクル』（*The Cycles of American History* 1986）の一章を割き、まだ産声を上げたばかりの共和国の行く末を慮って建国の父祖たちが右往左往する様を記している。既に「共和制の死すべき運命を懸念する気持ちは、1787年のフィラデルフィアには行き渡っていた」(Schlensinger 9)[6]が、その「懸念」は払拭されるどころか、以来、延々とこの共和国に付き纏うこととなった。新世界アメリカは自由平等と民主主義の御旗を掲げ、神の名のもと、堕落した旧世界に対する穢れなき理想郷となるべく、邁進する筈ではなかったのか。シュレンジャーは舌鋒鋭く指摘する。

> 我々はアメリカ史の一時期に、「無垢の終焉」という語句を不用意にあてはめる。これは致命的な間違いというよりは、好意的な文飾である。国は何度その無垢を失うことができるのか？カルヴァンとタキトゥスで育った人々が無垢でいられたはずがない。侵略、征服、虐殺の上で建設された国家で無垢なものなどなかった。黒人を組織的に奴隷とし、インディアンを殺した国民で無垢なものはなかった。革命によって成立し、その後、内乱によって引き裂かれた国家で無垢なものはなかった。(Schlensinger 14)

ここに浮かび上がるのは泥濘に残る醜怪な轍にも似た、苛烈を極めたであ

ろう理念追求型国家アメリカの軌跡に他ならない。この様な国家にあっては頓挫や挫折に伴う絶望は日常茶飯であり、それ故「雄弁なるコーダ」でも、「偉人たち」は「疲れてやつれた不安げな顔」を晒さねばならなかったのであろう。アメリカでは安易な大願成就の挙句の欣喜雀躍など絵空事めいてどうにも胡乱な響きを帯びて仕方なく、『ギャツビー』のニックの視点においてアメリカの夢が根幹より揺さ振りをかけられ、その胡散らしさが浮き彫りにされた所以もここにある。

この「偉人たち」に言及したところで、トリンブルの視点の真相も明らかとなろう。それは彼らにより脈々と引き継がれてきた視点であり、その端緒は彼らの祖であるベンジャミン・フランクリン（Benjamin Franklin）にまで遡るのである。『ギャツビー』のジェイムズ・ギャッツ（James Gatz）少年が子供向け通俗本の裏表紙に記した「時間割」（*Gatsby* 135）の出処があの有名な「十三の徳目」に求められるのは批評的常識となっているが、トリンブルの視点のそれもまた次のフランクリンの言葉に求められよう。

> しかしながら何もかも考え合わせてみると、大願が成就したことなど一度たりとてなく、しかもその足元に至ることさえ出来なかったわけだが、それにもかかわらず努力をしたおかげで、もし仮にそれを怠っていた場合と比べるならば、人間的にも成長し幸福にもなれた。（*Autobiography* 90）

引用は『フランクリン自伝』（*The Autobiography of Benjamin Franklin* 1818 ）からの一節である。数多のアメリカ人に読み継がれてきたであろうその影響力は計り知れない。注目すべきはフランクリン自らが、決して「成就」することのない「大願」を前にしてもなお「努力」を敢行するよう奨励していることであろう。それがトリンブルの視点に浮かぶ「基準」と合致することは言うまでもない。先に援用したペトリィの見解ではトリンブルの視点が人に「感染しやすい」とされていたが、もはやそれに訂正を加えぬわけにはゆくまい。「感染しやすい」のはトリンブルの視点ではなく、フランクリンのそれとすべきであろう。アメリカという苛烈極まる現実を諦観した「ヤンキーの父」の視点が、遥かアメリカ黎明期より「偉人たち」を経由し、20世紀のトリンブルにまで連綿と継承されていたので

ある。

「失われた十年」はそんなトリンブルの視点をその基調としているわけだが、ここに至って本論の目標に掲げた、「失われた十年」に潜むそのサイズとは不釣合いなほどに遠大なメッセージへの到達が叶うだろう。引用でフランクリンは、理念追及型国家アメリカにあっては夢や理想が空しく潰えようとも、敢えて言えば、むしろ潰えたからこそ享受し得る「幸せ」もあることを自らの経験に照らして説いている。あの「第一級の知性の基準」を満たし、感傷に染まることなく粉骨砕身した者のみが絶望の只中にあってなお束の間味わう、人事を尽くしきった後の透明な充足感にも似たささやかな「幸せ」の方が、余程このアメリカには似つかわしく、これこそアメリカの民が希求すべきものであると「ヤンキーの父」は諭しているのだ。この「基準」の真相がアメリカに到達し得るか否かの試金石となっていたこともここに由来する。「失われた十年」においてトリンブルがオリソンと並んで歩くニューヨークの五番街は、彼の視点において大きくその姿を変えていたことであろう。この建築家の前でそれはメトロポリスのファッショナブルな目抜き通りから一変すると、建国以来の長きに渡り先人たちにより踏み固められ、彼らの苦汁がその下に澱の様に堆積する一本の悪路と化していたに違いない。確かにそれを踏破するには相当な困難を伴うであろう。しかしそれは、かつて「ヤンキーの父」も享受した、アメリカの民が希求すべきあのささかな「幸せ」へと我々を導きつつ、地平の彼方にまで伸びていたのである。

終わりに

かつてフィッツジェラルドは流行作家として一世を風靡した。その軽妙洒脱で流麗な文体は好景気に舞い上がる享楽のジャズ・エイジにはいかにも似つかわしく、1920年代は作家とアメリカ社会の蜜月時代となった。だが1929年の株価大暴落を契機とする大恐慌を境に世相が大きく変わると、社会は掌を返したようにこの作家を見限ることとなる。時代の寵児から一転、時代に取り残されたフィッツジェラルドの長い「魂の漆黒の闇夜」の始まりである。フィッツジェラルドにとっての1930年代とは正しく「失われた十年」であった。先述の通り1930年代に入り自身はアルコール中毒を患い妻は精神病に倒れ、経済的困窮に追い込まれていった。1934年、完成

に9年の歳月を要した労作『夜はやさし』を発表するもそれはさしたる評判を呼ぶこともなく作家をいたく落胆させた。1930年代半ば、妻の高額な治療費と娘の教育費を捻出するため単身ハリウッドに渡った作家は、シナリオ・ライターとして映画製作という不慣れな共同作業に従事するとその才能を日々すり減らしていった。そして本論で取り上げた「失われた十年」を発表した翌年の1940年12月21日、フィッツジェラルドはハリウッドのアパートの一室で心臓発作に見舞われ44年の短い生涯を閉じている。彼の「魂の漆黒の闇夜」が明けることは遂になかったのだ。

果たしてこの「闇夜」のなかでフィッツジェラルドもまた、「ヤンキーの父」がアメリカの民に希求すべしと諭していた、あのささやかな「幸福」を味わっていたのであろうか。そうであったと願わずにはいられない。

註

1 以下「失われた十年」からの引用は*The Stories of F. Scott Fitzgerald* 所収のテクストを使用し、括弧内にページ数を記す。

2 例えばフィッツジェラルドの詳細な伝記を記したアンドルー・レボ（André Le Vot）はイエスが死から甦らせたラゾロ（Lazarus）の面影をトリンブルに見出しその再生の気配を指摘している（Le Vot 291）。その他Gleason（227）、Petry（259）、Bruccoli（472）参照。

3 数多ある評伝を紐解くまでもなく、フィッツジェラルドがアルコール中毒に苦しんだことは周知の事実であるが、己の苦境を赤裸々に綴った「ひび割れ」エッセイ群には何故かその宿痾に関する記述が一箇所も見当たらない。

4 Mizener（63－64）参照。

5 リチャード・リーハン（Richard Lehan）は「（その名が示唆するとおり）デイジーがギャツビーにとって花開いた様に、新世界はオランダの船乗りたちにとって『花開いた』のであった」と指摘している（Lehan 65）。

6 シュレンジャー『アメリカ史のサイクル』からの引用は猿谷要監修・飯野正子訳『アメリカ史のサイクルⅠ』（パーソナルメディア　1988）に拠る。

引用文献

Bruccoli, Matthew J. *Some Sort of Epic Grandeur: The Life of F. Scott Fitzgerald*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1981.

Bryer, Jackson R., ed. *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald: New Approaches in Criticism*. Madison: U of Wisconsin P, 1982.

——. *New Essays on F. Scott Fitzgerald's Neglected Stories*. Columbia and London: U of Missouri P, 1996.

Bryer, Jackson R., Allan Margolies, and Ruth Pirogozy, eds. *F. Scott Fitzgerald: new perspectives*. Athens and London: U of Georgia P, 1996.

Fitzgerald, F. Scott. "An Alcoholic Case." In *The Stories of F. Scott Fitzgerald: A Selection of 28 Stories*. Ed. Malcolm Cowley. New York: Charles Scribner's Sons, 1951.

——. "Babylon Revisited." In *The Stories of F. Scott Fitzgerald: A Selection of 28 Stories*. Ed. Malcolm Cowley. New York: Charles Scribner's Sons, 1951.

——. "The Crack-Up," "Pasting It Together," and "Handle with Care." In *My Lost City: Personal Essays, 1920—1940*. Ed. James L. West Ⅲ. Cambridge: Cambridge UP, 2005.

——.*The Great Gatsby*. Ed. Matthew J. Bruccoli. Cambridge: Cambridge UP, 1991.

——. "The Lost Decade." In *The Stories of F. Scott Fitzgerald: A Selection of 28 Stories*.

——. "My Lost City." In *My Lost City: Personal Essays, 1920—1940*.

——. "The Swimmers." In *Bits of Paradise by F. Scott Fitzgerald and Zelda Fitzgerald*. Selected by Matthew J. Bruccoli with assistance of Scottie Fitzgerald Smith. London: Bodley Head, 1973.

——. *Tender is the Night*. New York: Charles Scribner's Sons, 1934.

Franklin, Benjamin. *The Autobiography of Benjamin Franklin*. In *The Autobiography and Other Writings*. Ed. Kenneth Siverman. London: Penguin Classics, 2003.

Friedman, Melvin J. "'The Swimmers': Paris and Virginia Reconciled." In *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald: New*

Approaches in Criticism. 251－260.

Gleason, Edward J. "Going Toward the Flame: Reading Allusions in the *Esquire* stories," In *F. Scott Fitzgerald: new perspectives.* 216－230.

Lehan, Richard. *The Great Gatsby: The Limits of Wonder.* Boston: Twayne, 1990.

Le Vot, André. *F. Scott Fitzgerald.* New York: Doubleday & Company, Inc., 1983.

Mizener, Arthur. *The Far Side of Paradise: A Biography of F. Scott Fitzgerald.* Boston: Houghton Mifflin, 1965.

Petry, Alice Hall. "Recovering 'The Lost Decade'." In *New Essays on F. Scott Fitzgerald's Neglected Stories.* 253－262.

Turnbull, Andrew. *Scott Fitzgerald.* New York: Charles Scribner's Sons, 1962.

アーサー・M・シュレンジャー, Jr.『アメリカ史のサイクルⅠ』猿谷要監修・飯野正子訳　パーソナルメディア　1988。